

生徒の実態把握から教育目標を設定し、「学び直し」を教育課程に位置づける

北海道北広島西高校では、学校経営の重点目標の1つとして「学び直し」を掲げ、教育活動全体の見直し・再編成に取り組んでいる。

学校が置かれている状況をデータやアンケートで客観的に把握した上で、教師が教科や分掌を超えた話し合いを通して一体となり、特色ある教育活動を組織的・協働的に推進している。

育てたい生徒像を 学校全体で語り合う

北海道北広島西高校は、基礎学力不足のため高校での学習に問題を抱える生徒を対象にした取り組みとして、2014年度より「学び直し」を導入している。きっかけは、その前年の13年度、当時の教務部長の発案で、5〜10年先を見据えた学校のあり方を検討する有志のワーキンググループ「将来構想会」が組織されたことだったと、現在の教務部長の徳橋孝之先生は振り返る。

「各教科で基礎学力向上のための

取り組みは行っていました。期待通りの成果を上げているという実感がいま一つ得られていませんでした。育てたい生徒像と教育内容がミスマッチを起しているのではないかと感じていた時、基礎学力向上の方策について話し合ってみないかと声をかけられたのです」（徳橋先生）

教科、分掌、そしてキャリアを超えて集まった約10人の教師が、ざっくばらんに話し合う中で、いろいろなアイデアが出てきたと大澤允先生は話す。

「どんな生徒を育てたいか、そのために解決すべき課題は何かを、定期

的に集まり、自由に話し合いました。若手の私にとっては、ほかの先生の考え、気持ちが分かって新鮮でしたし、自分の頭の中が整理されるような気がしました。それまで以上に自信を持って教壇に立てるようになったと思います」（大澤先生）

将来構想会の発足から数か月、そこで交わされた意見を、全教師と共有したいという声が増え、メンバークラウドから出た伊藤先生は当時の様子を語る。

「将来構想会での対話を通して、語り合うことで教師が一丸とされることを実感した私たちは、ほかの先生

とも思いを共有したいと考えるようになりました。そこで、校長を通して学校全体に呼びかけ、コンセンサス会議を実施したのです。それは全教師を10人程度ずつの小グループに分けて、各グループに将来構想会のメンバーが1人ずつファシリテーターとして参加し、先生方の意見を吸い上げるといったものです」（伊藤先生）

若手の大澤先生もコンセンサス会議ではファシリテーター役を務めた。目の前にいたのは皆、自分よりも経験豊富な先輩ばかりだった。

「自分にそのような役が務まるのかと不安でした。しかし、話し合い

が進む中で、先輩方が『こうして育てたい生徒像を改めて話し合うことは大切なね』と言ってくれたのです。それまで接点のなかった先生もいらっしやったのですが、垣根が一気になくなっていく、そんな時間でした』（大澤先生）



北海道北広島西高校校長
廣田定憲 ひろた・さだのり
教職歴33年。同校に赴任して1年目。「春風の中に坐す」



北海道北広島西高校副校長
佐賀 聡 さが・さとし
教職歴28年。同校に赴任して3年目。「泰然自若を心がける」



北海道北広島西高校
伊藤 準 いとう・じゅん
教職歴23年。同校に赴任して10年目。進路指導部長。「長いものには巻かれたふりをする」



北海道北広島西高校
徳橋孝之 とくはし・たかゆき
教職歴14年。同校に赴任して5年目。教務部長。「不決断は最大の害悪。まずは前進」



北海道北広島西高校
大澤 允 おさわ・まこと
教職歴14年。同校に赴任して5年目。学力向上推進リーダー。「まずはやってみよう」

有志の将来構想会、そして学校全体でのコンセンサス会議で育てたい生徒像を語り合った結果、学び直しと、そこで得た自己肯定感を基礎としたキャリア教育を2軸とした「学力向上のためのグランドデザイン」がまとめられた（図1）。

「対話の中で出てきた言葉をできる限り生かすことで、教師一人ひとりが自分の思いが盛り込まれていると実感できるものになりました。そうして、全員が共感できる土台ができたことで、その教育目標の実現のために自分たちは何ができるのかと

北海道北広島西高校

- 「志行必成」を校訓とし、学び直しとキャリア教育を軸に、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな身体」のバランスのとれた教育を展開。
- 設立 1983（昭和58）年
- 形態 全日制／普通科／共学
- 生徒数 1学年約290人
- 2016年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、小樽商科大、弘前大に2人が合格。私立大は、北星学園大、北海学園大、法政大、関西大などに延べ65人が合格。短大、専門学校進学124人。就職は、日本郵便株式会社、北海道支社、北海道旅客鉄道株式会社、株式会社北海道銀行などに56人。公務員9人。
- URL <http://www.kitahiroshimanishi.hokkaido-c.ed.jp>

いった、具体的な検討に移ることができたのです」（徳橋先生）

週末課題スタート、そして学校設定科目の設定へ

改革の最初の一步は、生徒の学力を定観測することだった。1・2年次にそれぞれ年1回の実施だったベネッセの「基礎力診断テスト」(*)を13年度より複数回実施にし、教師個々の経験や感覚だけに頼らない生徒把握を目指した。また、並行して学習

状況調査も行った。生徒の1日の家庭学習時間が30分にも満たないという現実が明らかになり、学習意欲の喚起と家庭学習習慣の確立が喫緊の課題であると学校全体で共有した。

そこで、14年度にスタートさせたのが1年生を対象とした週末課題だ。それは、1学年団の国語・数学・英語の教師が毎週末に課題を配布し、週明けに回収するというもので、家庭学習の習慣化が目的のため、各教科10分程度で終わらせる平易な問題と

図1 将来構想会の「学力向上のためのグランドデザイン」



* GTZ（学習到達ゾーン）という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性（自我同一性）を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。

特集

SPECIAL ISSUE
全教師で踏み出す「カリキュラム・マネジメント」実現の第一歩

した。週明けに、担任・副担任が提出の有無を記録し、未提出者には放課後に課題に取り組ませることにした。

「机に向かう習慣をつけるためには、とにかく毎週続けることが大切だと学年団で意思統一しました。そのかいかあって、週末課題の提出率は、95〜97%という高い数値で推移し、その後の学習状況調査でも、家庭学習時間の大幅な増加が見られました」（伊藤先生）

教師の意思統一を土台とした地道な指導は、生徒の学力向上に確実につながり、「基礎力診断テスト」におけるGTZ（*1）の分布状況も好転した。しかし、高校レベルの学習内容の理解に困難を感じる生徒は依然として多く存在した。また、同校の在校生とその保護者、そして地域住民の合計約1000人を対象に、学校に対する満足度調査を実施したところ、学力向上への期待値は高かったが、その現状には決して満足しているとは言えないことも明らかになった。

同じ頃、同校は、学び直しに取り組み先進校を視察した。

いていない生徒が覚えるのは解法ではなく、答えである。自分で学ぶ術を獲得する機会を与えないと、いつまでも分かるようにはならない」と、実践に基づく意見を伺いました。早速その内容を校内に周知しました」（徳橋先生）

週末課題を続けるだけでは、育てたい生徒像は実現できないと判断した同校は、15年度から、国語・数学・英語の基本的事項の定着を図るため、学び直し科目にあたる学校設定科目「ベーシックスタディ」（図2）を教育課程に位置づけることにした。

新しい取り組みに合わせて従来の取り組みをリデザイン

学び直しを目的とした学校設定科目「ベーシックスタディ」では、ベネッセの「マナトレ」（*2）を用いて、1枚10分相当のプリント3枚に取り組ませることとした。授業は3人の教師がチーム・ティーチングで実施。2人が机間巡視し、生徒は分からない問題があれば、その教師たちに自由に質問できるといった仕組みにした。進行役の教師が全体に向けて簡単な説明や解説を行うこと

図2 学校設定科目「ベーシックスタディ」シラバス

科目名		ベーシックスタディ				
学年	必修/選択	単位	総時数	使用教科書		
1	必修	1	35	補助教材	マナトレ	
授業の概要		高校で学習する内容を理解できるよう、小・中学校の国語、数学、英語の授業で学んだ内容の復習をグループ学習や協働学習の形式で行います。				
学習到達目標		高校での学習に必要な語いや計算方法を理解でき、それらを活用して自ら課題に取り組み、解決することができる。				
標準的な到達レベル		1人で解答することが困難な課題や問題であっても、教員や友人から十分なヒントや手助けが与えられれば解答を導き出すことができる。				
観点別評価 (%)						
		定期試験	提出物	課題	授業姿勢	合計
総合評価割合		40	20	20	20	100
知識・理解		40	10			50
関心・意欲			10	20	20	50
学習上の留意点						
求められる力 (学び直し)		<ul style="list-style-type: none"> どの教科を学ぶ時にも必要な「読み・書き・計算」を不自由なく行う力 自ら考えようと行動する力 				
キャリア教育		クラス全員が目標を達成できるよう協力しながら問題解決に取り組むことを通して、協調性や自分の考えなどを相手に伝える能力を伸ばす。				

*学校資料を基に編集部で作成

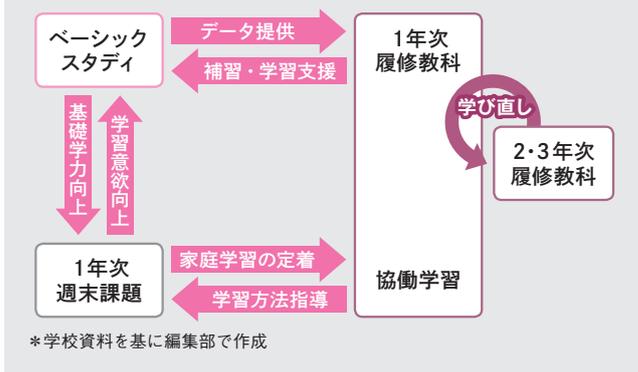
もあるが、できる限り生徒が自分の力で答えないたどり着くよう、安易に解法を教えないようにした。佐賀聡副校長は、「取り組み前に、指導の意味や留意点を共通理解することが重要」と説明する。

「マナトレ」を使って、チーム・

ティーチングで教えることは理解できても、3人の役割分担など、授業の様子を詳細にイメージすることは難しいので、先生方から不安や疑問の声を集めてそれらに丁寧に応えていきました。その後、先行して1クラスで公開モデル授業を実施しまし

*1 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」までの15段階があり、基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。 *2 ベネッセの教材の1つ。学習力を身につける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。

図3 「ベーシックスタディ」を軸にした学びのキャリア形成



た。それによって、指導の意味や留意点が具体的に理解できたことで、全員の先生方が納得して授業を始めることができました」（佐賀副校長）

「『ベーシックスタディ』を通して、補習や学習支援の必要な生徒を発見できるよう、『マナトレ』の正答率は週末課題の提出率などと合わせてデータ化され、さらに週末課題や各教科の学習内容との関連づけ、学年・教科・分掌間の連携を図ることとし

た（図3）。「ベーシックスタディ」は基礎学力の向上を目的とするため、週末課題は前年度よりもやや難易度を高め、学んだことが定着したことを実感させる役割となった。

学び直しを授業に組み込んだ効果は顕著に表れた。「基礎力診断テスト」のGTZのAゾーンは前年度同時期と比較して、0人から11人に、Bゾーンは15人から33人になった。また、学習困難を抱えるDゾーンから3割近い生徒がCゾーンに伸びた。

学び直し科目の導入によって、職員室での教師の会話も変わった。

「『学力向上』や『学び直し』といったキーワードが日常会話の中で頻繁に聞かれるようになりました。また、その目標を達成するためにどうすればよいのかといった、それぞれの授業での取り組みの成果や反省点を先生方が語り合う場面が明らかに増えました。基礎・基本の習得とともに重要視されている、思考力・判断力・表現力の育成についても、その鍵となるアクティブ・ラーニングの授業実践の共有が活発に行われていま

す」（佐賀副校長）

学び直し科目の設定と並行して、1年生の宿泊研修の内容も学び直しとキャリア教育の観点から見直された。15年度は学習法を学ぶ自学自習の時間を充実させ、さらにこれまではなかった大学見学やソーシャルスキル研修を盛り込むなど、育てたい生徒像から取り組むべき内容を吟味していった。

未来を見通した 不断の教育改革を

16年度は、「学力向上とキャリア教育の取り組みの質を高め、発展させる時期」と、今年度同校に赴任した廣田定憲校長は語る。

「改革を続けていくためには、学校で引き継がれている『たすき』を管理職がしっかりと受け取るのが大切です。そして、今取り組んでいることは、目の前の生徒のためでもあると同時に、5年後、10年後の生徒のためでもあるのだと強く意識することが求められます」（廣田校長）

廣田校長は「学びの連続性を考え

た時、小・中学校と連携したカリキュラム・マネジメントは必然だ」と語る。同校の教師が地域の小・中学校の授業を見学し、また小・中学校の教師に高校の授業を見てもらい、アクティブ・ラーニングや観点別評価について意見交換するワークショップを開催する予定だ。

「教師の仕事は『未来をつくる人材を育てること』だからこそ、未来の社会で有為な人材とはどんな人材なのかを、教師が語り合うことが大切です。中央教育審議会教育課程企画特別部会の論点整理が『2030年の社会と子供たちの未来』を見据えて打ち出されたように、激変する社会を生きる生徒を育てるといふことを共通認識することで、おのずと自校の教育のあり方が見えてくるはず。そして、私が本校で受け取った『たすき』が、学び直しとキャリア教育だったのです。これまでの取り組みを進化させながら、先生方の志が1つにまとまり、大きな力となるような場づくりをこれからも行っていきます」（廣田校長）